

中世イギリス文学、これが、まず、わたしの研究分野ということになっている。現に文学博士の学位論文^{*}は、十四世紀の『農夫ピアスの幻想』についての研究である。

どうして中世文学のような人のあまりやりたがらぬ分野に手をだしたのかというと、いろいろ当面の問題を分析したり、整理したりしているうちに、自然と、読まなければならぬものが、中世紀に書かれたものが多くなり、それに、チョーサー学の権威、上野直蔵博士というよき指導者にめぐまれたこともあって、気がつくくと、中世文学者になっていた。

大学院で十六世紀のスペンサーの詩を研究した。スペンサーの詩は、いわば、新旧思想の、つぼのようなもので、当時のイギリスとしては最新流行の人文主義の考え方もあれば、中世紀独特の恋愛観や宗教思想もあり、古典ギリシヤ思想もあるといった具合である。こうした要素を一つ一つより分けているうちに、スペンサーは、世間からプロテスタントだといわれておりながら、その作品のなかに意外に中世カソリン

ズム独特のイメージシンボルが多いので、不思議に思ったのが、実は中世紀の書かれたものに目を通しかけた端緒なのである。

かねて、スペンサーの作品における「愛」とか「友情」とかいう観念の扱い方に興味をもっていたので、イギリス中世文学を読む



「農夫ピアスの幻想」

斎藤 勇

ときもそうした興味を先行させていった。中世紀では、キリスト教的愛と世俗的愛との表現が峻別したいほどよく似ている。そこでこの表現の類似性を利用していろいろな文学的表現があらわれてくる。『修道女の戒律』や、『真珠』などにわたしがと

り組んだのも、そうした愛の文学的表現にメスをいれるつもりがあつてのことであつた。『農夫ピアス』を読みかけたのも同様な意図が最初あつたのであるが、ここでは、キリスト教的愛と世俗愛があまりにもはっきりと区別されており、この二つの愛の微妙な相関関係は探るよしもなく、むしろ対立による劇的な効果が印象的であつた。それにこの作品には難解な寓意が多く、この寓意を解くことに大半の精力をそそがねばならない有様であつた。わたしの今回の学位論文はそのうちもつとも難解な、そしてそれを解くことが全詩の意味解説にたらなる一つのシーンの寓意を各方面からとときほぐしたものである。ここでその経過をたどることは一般的興味をよばない特殊問題について縷説することになるので、するつもりはないが、わたしの分析と結論が成功であつたか否かは、わたし自身の自負は別として、学界の批判を謙虚にま

^{*} A Study of the Pardon Scene of Piers the Plowman (文学部助教・英文学)